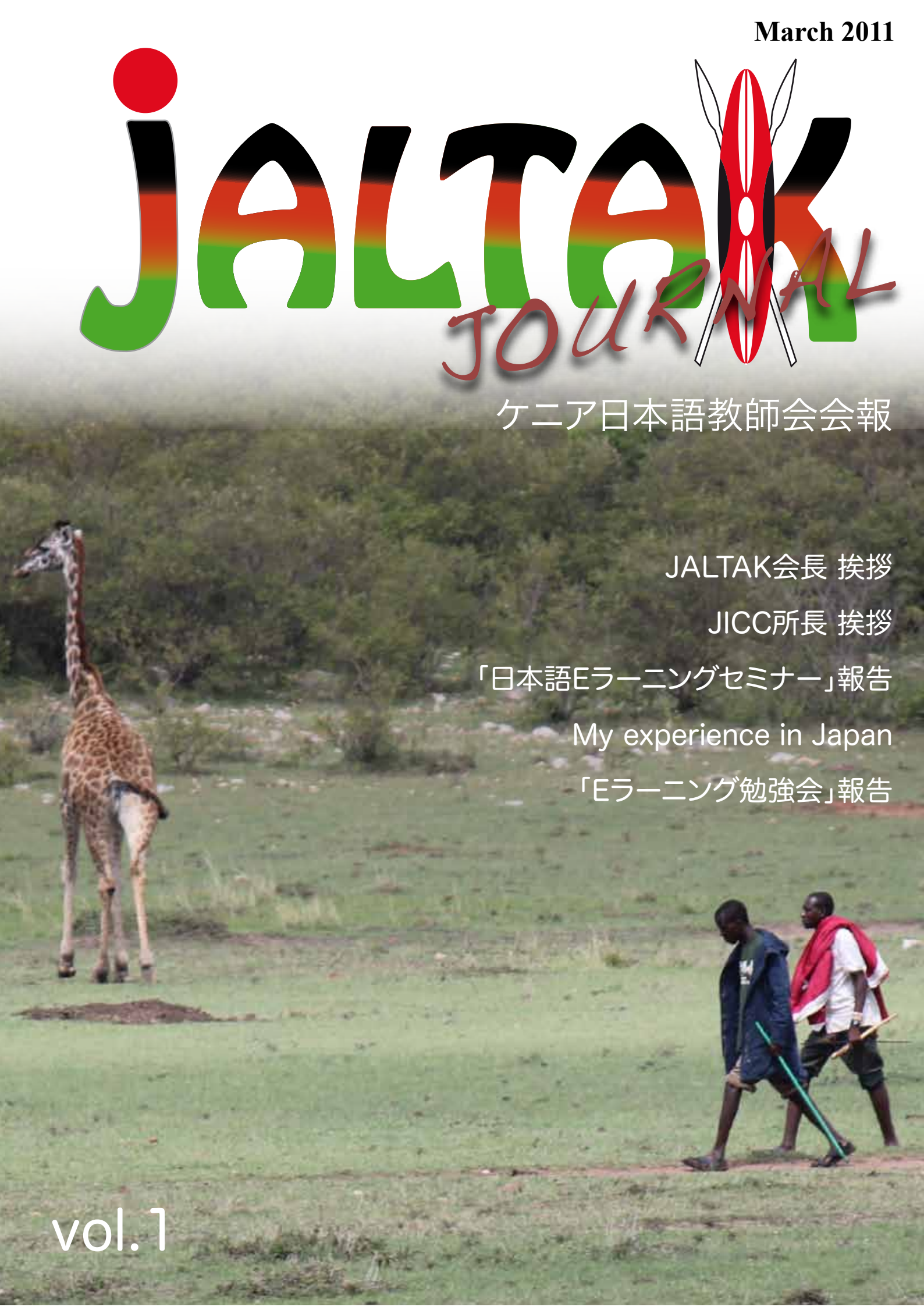
March 2011

JALTAK JOURNAL

ケニア日本語教師会会報



JALTAK会長 挨拶

JICC所長 挨拶

「日本語Eラーニングセミナー」報告

My experience in Japan

「Eラーニング勉強会」報告

vol.1

JALTAK会長 挨拶

JALTAK会長 中村 勝司
Nakamura Katsuji
Chair, Japanese Teachers' Association of Kenya
Lecturer, USIU

今回国際交流基金から派遣の蟻末淳先生のご提案、推進で、こうしてケニア日本語教師会のEジャーナルが発行されること運びとなりました。会発足から１０年ほどになり、私自身が会長になって一年ちょっととなりましたが、ついつい小さくまとまって、活動と言っても定期会、スピーチコンテスト、日本語能力試験と、いつもやっていることだけをこなすだけの、マンネリがちであった会の活動の中で、こうして新たな展開を進めてくださっている蟻末先生には感謝でいっぱいであります。インターネットはケニアのような国でこそ大きな力になるのかもしれません。我々のような財政的にも何の基盤もない会でもお金をかけずにアウトプットができ、簡単に世界とつながり、ケニアにいながらグローバルコミュニティーの一端に加わることができるのですから。まだまだ規模的にも実力的にも微弱な教師会ではありますが、これを契機に、会の議論、話題、研究活動が促進され、そうしたものがインターネットを通し世界の友人と共有され、ケニア日本語教師会が新たな時代を迎えていくことを切に望んでおります。

It is my heartfelt pleasure to witness that the first issue of E-Journal of Japanese Teachers' Association of Kenya has hereby been published. The journal is the brainchild of Prof. Jun Arisue, Japan Foundation expert who is a visiting lecturer to Kenyatta University, and it is his tireless efforts that led to the birth of this journal. I would therefore like to convey my appreciation to him on behalf of the association.

It has been around ten years ever since the association was formed and slightly more than a year ever since I took up chair's position. It is sometimes very difficult to keep the organization like ours alive and growing all the time because any associations are rather to suffer from monotony of activities or a deadlock after years of existence. Furthermore, so limited are our manpower and financial resource that it has not been easy-sailing to conduct just two events in each year which have been the main activities of the association thus far, that is, annual international Japanese Proficiency Test and Japanese speech contest. What it means is that most of the activities of the association have been rather administrative and there have not been much of other activities.

The launch of the journal is therefore very timely for the association, because it can potentially help break the monotony of our activities and open up the new frontiers for us beyond the two events. Our journal, I believe, would facilitate our discussions, exchanges of ideas, research activities, sharing of experiences and filing the records of events. It also helps provides an effective tool to share and communicate all those with the rest of the world, without incurring heavy financial strain on our budget. The potentiality of the project is therefore limitless, and if we succeed in this new enterprise, it can take the association to the next level.

The challenge then is whether we can all cherish it and work hard to contribute to its development. If we can, and I believe that we will, the journal will be a milestone to the history of Japanese language education in Kenya. It is my sincere wish, therefore, that all the members of the association will take the ownership of the project and think about how to make it a shining star of such journals.

在ケニア日本大使館広報文化センター所長 挨拶

JICC所長 菊地 斉
Kikuchi Hitoshi
Director, Japan Information and Culture Center
(JICC)

２００７年末の当地着任以降、①日本と縁のあるケニア人同窓会組織の立ち上げ、及び、②ケニアにおける日本語教育の普及、を大使館広報文化センターの最重要活動の両輪に位置付け、努力してきました。

この結果、①については、紆余曲折を経て昨年１１月に漸く、国費留学生、ＪＩＣＡ研修生、ＡＯＴＳ研修生、日本学術振興会フェロー、世界青年の船事業といった当地に所在する各同窓会組織を束ねたケニア日本同窓会（ＫＥＪＡＡ）の正式発足に漕ぎ着けました。今後、ケニア社会に根ざした意味のある活動の展開が期待されているところです。他方、②については、昨年度における大使館の今後３年程度の中長期的目標として、日本語学習者を１００００名程度まで増すと共に日本語能力試験受験者総数を１５０名、また、日本語弁論大会参加者総数を３０名まで拡大するとの目標を打ち立てました。尤も、既にここに

掲げた個別目標は殆ど達成されているものと推察しますが。

ナイロビ着任当時、ケニア国内の日本語学習者は約５００名と聞いておりましたが、この３年間で、ナイロビより北に車で2時間のカラチナ地区や西部キスム近郊での青年海外協力隊員による現地学校での日本語指導、最近ではアンボセリ国立公園付近の在留邦人が関与している学校での日本語授業の開始等を含め、ケニア国内の各地で日本（語）クラブなるものが雨後の筍の如く発足していると聞いており、これらを合わせたら、現在の日本語学習者数は全くの推測ですが、１０００名程度には増加しているのではないでしょうか。

２００１年末にケニア日本語教師会（ＪＡＬＴＡＫ）が創設されました。着任以降、大使館としては、ＪＡＬＴＡＫの３大目標として①日本能力試験の持続的実施、②日本語弁論大会の継続開催、③ケニア人日本語教師の能力向上を位置付け、積極的に支援して参りました。お陰様で、①については２００６年から５年間一度の中断もなく継続的に実施され、②についても昨年２月には当地の私立ストラスモア大学にて観衆４００名以上の参加を得て盛大に開催され、今年も３月５日大使館にて開催することが決定しました。一方、③についてはＪＡＬＴＡＫとしての系統的取組は殆ど皆無であったのが実情で、今後の課題です。その意味で、本年１月に刷新された中村新会長を初めとする新執行部に大きな期待を寄せているところです。

いずれにせよ、海外における日本語教育の普及が日本国全体として大きな目標の一つとして謳われている中、当地でも日本語教育の普及のために大使館広報文化センターとして応分の貢献をして参る所存です。

執行部 挨拶

副会長 ポール・ワイナイナ
ウタリーカレッジ 日本語教員
Paul Wainaina
Lecturer, Utalii College

私はワイナイナと申します。ウタリカレッジで学生達に日本語を教えています。最近、日本語に興味があるケニア人の数が増えているのですが、ケニアにいる日本語の先生が足りないので、今教えている先生が頑張っています。例えば、セミナーとかウタリカレッジで毎週木曜日、教授法を勉強しています。国際交流基金のお蔭もあり、先生の日本語能力が向上していると思います。皆さん、日本語は本当に面白いですから、やってみてください。

書記 近藤 彩
ウタリーカレッジ 日本語教員
Aya Kondo
Lecturer, Utalii College

こんにちは。

この度、書記（しょき）を担当（たんとう）させていただくことになった近藤彩（こんどう　あや）と申します。

JALTAK活動（かつどう）がますます発展（はってん）しますように皆様と共にがんばっていきたいです。

私自身がケニアを愛するように、ケニアに住む多くの方々に日本・日本語に興味（きょうみ）関心（かんしん）を抱いていただければたいへんうれしく思います。

「一期一会（いちごいちえ）」

“Treasure every meeting as an experience that will never come again”

「初心（しょしん）忘るべからず」

“Never forget the ideals with which you started out”

という心で日々（ひび）精進（しょうじん）して参りたいです。

皆様、どうぞよろしくお願いいたします。

会計 ジョージ・カディオリ
Language Solution and Business Center 日本語教員
George Kadioli
Japanese teacher,
Language Solution and Business Center

I teach Japanese at Lanugage Solution and Business Center, as well as Interworld College of Tourism and Related

Studies. I also teach privately and do translation / interpretation.

I enjoy teaching more than anything.

『日本語Eラーニングセミナー』報告

蟻末 淳
国際交流基金日本語専門家
ケニヤッタ大学客員講師
Jun Arisue
Japan Foundation, Japanese-Language Specialist
Visiting Lecturer, Kenyatta University

2010年11月29日、ウタリ・カレッジにて、東京外国語大学宇佐美まゆみ教授、明海大学山下早代子教授を、日本から招聘し、JALTAK(ケニア日本語教師会)主催、国際交流基金後援の下、日本語教育Eラーニングセミナーが開催されました。ケニア人教員、日本人教員の他、ケニア人日本語学習者、日本大使館関係者ら、15名が参加しました。

開会にあたり、まず、JICC(日本国大使館日本文化広報センター)菊地所長が現在のケニアでの日本語教育の現状について話され、日本語教育の普及の抱負を述べられました。続けて、JALTAK中村会長の挨拶では、ケニア日本語教師会の活動について報告がありました。

第一部の山下教授の講演「語用論とEラーニング」では、語用論の解説の後、謝罪の場面でのスワヒリ語、英語、日本語での言い方の違いを実際に比較し、ケニアでの文化的・言語的背景などについて、意見が交わされました。また、語用論に基いた外国語習得についてのEラーニング教材が紹介されました。

続いて、第二部、宇佐美教授の講演「自然会話を素材とするWEB教材の開発の趣旨とその使い方」では、従来の語学教材用に作られた会話との比較を通じて、自然会話を教材に使用する意義が明らかにされ、開発中の自然会話WEB教材が紹介されました。

第三部として、Eラーニングに関するフォーラムとして、意見の相互交換が行われました。ケニアでのEラーニングの状況や、導入に関しての活発な議論がなされ、ケニアにおける、これからのEラーニング・日本語教育の発展のための重要な一歩となることが印象づけられました。

ケニアでは地理的条件などもあり、日本語教育関係のセミナーなどの開催が少なく、日本語教員、学習者にとって、大変貴重な機会になりました。

以下、ウタリーカレッジ日本語教員近藤彩さん、ケニヤッタ大学学生イミンザさんの報告をご紹介します。

近藤 彩
ウタリーカレッジ日本語教員
Aya Kondo
Lecturer, Utalii College

確認事項

語用論とは：

言葉を使用する人が、どのように言葉を選び、それが社会的相互行為の中でどのような制限を受け、他の人との言語コミュニケーション上どのような効力を発揮するかについて研究する学問。

＜山下氏講演資料より＞

意味論とは：

語や文の意味をそれが発話された場面や話し手、聞

き手が共有している背景知識といった要素から切り離してとらえ（→実際には発話の意味はことばの単なる辞書的な意味だけではなく、それが発話された場面や会話参加者がもっている背景知識によって決まる）、語の意味・語と語の意味関係・慣用句などの句の意味を研究の対象とする。

●感想とまとめ

「ことばを辞書通りに解釈することは、時として軋轢、喧嘩、誤解を生じさせる」

A：「暑いですね。（→窓を開けてほしいなあ）」

B：「ええ、暑いですね。」

上記の会話は、発話部分を文法的にみれば何の問題もなく、Aに賛同しているBの返答から「暑い状況」を読み手である私たち第三者にも示しているとも言える。しかし、これが依頼の発話だと考えるとBがそのまま発話を終了させるには問題がある。つまり、Aの発話行為がBには機能されなかったのである。

それを避けるために非母語話者である第二言語学習者はその言葉に含まれる背景及び要素をも学ぶ必要がある。しかし、これは何も第二言語学習者だけに限ったことではない。同じ国に育ち、同じ言語を使う者同士でも年齢の差、育った環境により、相手の返答に違和感を覚えることが多々ある。それは「語用論的能力に欠く」と言えよう。日本古来の言い回しである「以心伝心」「暗黙の了解」が互いに備わっていれば、相手の言わんとすることが一語一句あらわれずとも自然と行動できよう。また別の言い方で述べるならば、「気が利く」か「気が利かない」ということにもつながるであろう。

「気が利くか否か」で言語活動を学問としてみることは、飛躍しすぎかもしれないが、第二言語学習者にとっては、言語学習よりも前に個人の性格も大きく関与していると考えられないだろうか。私の教え子の中に、ずいぶんと配慮する方がいた。それは、「本題」の前後に「聞き手に失礼がないように」と気遣いの言葉を求めてきたことにある。もちろん、それは、母語干渉ともかかわりそうだが。

語学学習者にとって「読む・書く・聞く・話す」という四技能全て、あるいはその幾つかが上達することは、自己の励みや次への目標となる。だが、「第二言語環境」に身を置かねばならない学習者にとっては、上達すればするほど、「異文化間における語用論的能力を的確に身につけなくてはならない。

「異文化間語用論」：文化的に特徴のある相互行為のスタイルは、その文化独自の決まった（発話の）予測と、解釈方法を導くことにより、文化間あるいは、異文化コミュニケーション上軋轢を生じさせる可能性がある。＜山下氏講演資料より＞）

最も顕著な例が「考えておきます」である。英語話者にとっては、それは文面通りの解釈であるが、日本語では、その意味内容は異なる。商談では、「断られた」と解釈しなければならない。このような状況が異文化コミュニケーション上軋轢を生じさせる。

他にも「勧誘」でみるならば、

A：「今日、映画を見に行きませんか？」

B：「すみません。今日はちょっと用事がありまして…」

Aは、その場でBに断られている。Aは、Bの理由を素直に受け入れるであろう。ただし、これが、何度も続くようであれば、「実際に用事がある」と共に「一緒に行きたくないらしい」ということをAは同時に解釈する必要がある。日本語は、相手に面と向かって断ることを憚り、婉曲に何となく伝えることが多く、それが第二言語学習者にとっては難しいのである。

海外で日本語を学ぶ学習者は、その言語知識と能力を活かし、観光業従事者に携わる人たちが多い。観光業に携わるのであるから、ホスピタリティーに関しては、その国独自、あるいは国際レベルのマニュアルでもって身につけてはいるであろう。しかし、第二言語における発話予測というのは言語個々で解釈しなければならないため、様々な実例から学ぶ必要がある。文化の違いにより、なかなか受け入れがたいものもあるかも知れないが、山下氏の掲げる「イラストの利便性」というものを用いれば、スムーズに学習できる。

イラストを見て、自分の言語でならば「謝罪」「苦情」「依頼」「断り」「褒める」をどのように切りだすか。また、第二言語ならば、どのように解釈されるかということをイメージから、学びとることができる。イメージ化されたものは、整理もしやすい。

「あなただったら、その場面でどう言うか書いてくださ

い。」

山下氏のイラスト質問用紙にそれぞれの母語で答えた。ケニア人と日本人では、謝罪のストラテジーに大きな差はあまり出なかったが、典型的な日本人の回答として、良い意味での「ごまかし案」が出た。お互いが嫌な思いをしないための術である。この術を身につけることは、お互いの関係を良好なものとして保てるが、必ずそのフォローをしなければ、「有言不実行」でしかならず、サービス業のプロにはなれない。サービス業を目指す学習者は「異文化間における語用論的能力」はもちろんのこと、それに即した「解決法」をも語学学習のなかから身につけなくてはならない。

さきほどのイラスト質問用紙の話に戻るが、とても興味深いやりとりがあった。ケニア人の発する「もう少し待ってください」は、ケニアでは、「あてにならない（信用ならない）」という意味である。ケニア人の方が述べた事実であるとともに私たち日本人も「なるほど」と同感した。また別の国で、「soon come」は「never come」の意味だと諭されたことをふと思い出した。

前述の内容から、海外で日本語を教える日本人（日本語母語話者）も当然、「異文化間における語用論的能力」があって然りである。お互いの文化を受け入れるかどうかは人それぞれであろうが、「知っているかどうかでまた心積もりが変わってくるからである。これこそ、「軋轢」「喧嘩」「誤解」、さらには「ストレス」を避けるストラテジーである。

「真のコミュニケーション能力を養成するためには、教材用に作られたモデルとしての会話ではない、非母語話者も含む様々な場面における『自然会話』の教材化が必須である。」

＜宇佐美氏講演資料より＞

“自然会話の必要性”を「教材のために作られた会話」と「自然会話」を対比しながら、ＷＥＢ上での学習方法を紹介頂いた。

確かに従来の会話用ビデオテキストなどをみると、若干違和感を覚えることがある。それはあまりにも無駄のない会話ですっきりと仕上げられているが所以であろう。「言い淀み」や「あいづち」というものがほとんどなく、まるでニュースキャスターのようである。公の場など、よほど注意が必要な場所でない限り、日本語には「あいづち」などが付き物である。それが全くないと「わざとらしさ」を感じ、完璧に仕上げられているのに不自然に聞こえてしまう。

自然会話では、「求めた内容」だけに情報提供をしてくれるようなものはほとんどない。相手と共有している内容であれば、「無駄のない会話」であるかもしれない。しかし、共有するがゆえに「余剰」というものが提供され、学習者は「クラスで習ったものと違う」と動揺してしまうだろう。それどころか、共有がなければ、言葉の問題ではなく、話題の欠落が生じ、「求めた内容」の前提を作るために、聞き手は学習者に様々な質問をすると予想される。

自然会話のビデオ（不動産編）を拝見すると、従来の

教材用に作られたテキストとはちがい、「話の流れが一度違う方面に流れ、また元に戻り、解決」するというもので見ていて興味深かった。「学習者が現在持つ語学力を駆使し、最終的に目的を果たすというところ、また、語学力の問題ではなく、日本語話者の「勘違い場面」もあらわれ、様々なことが学べる教材だと感じた。一種の謎解きにも考えられ、これに気がつく学習者がどれだけいるかも興味深いところである。もちろん、日本人日本語教師のうち、何人が気がついていたかということも。

自然会話ビデオがモデルの学習者の国だけでなく、世界中の人が見られるようにＷＥＢ上に開設されていることが、たいへん有効に感じた。「このとき、自分だったらどうする?」と考えたり、「モデルと日本人の少し違う発音に気がついたりと世界中の人が、日本語学習意欲を高め

られるのではないかと思った。ネットワークさえ完備されていれば、とても楽しい学習の場である。

世界中のＷＥＢ参加者が良きライバルであり、現代風「朋遠方より来るあり、また、楽しからずや。」となろう。

「従来の教科書」では学びにくいこと、それをいかにして教師は指導していくべきか、その解決法を今回のセミナーで熟考することができた。言葉だけでなく、その裏にあるものをこれからも大切にしていきたい。

Mariemar Iminza

Student, Kenyatta University

The presentation on Pragmatic and E-learning by Sayoko Yamashita was very enlightening to me as a student intending to plunge into teaching after my undergraduate studies. As a student learning Japanese as a foreign language, I am faced from time to time with constraints when using the language in social interactions. This maybe due to environment through which I am undertaking my studies since its much of an English oriented society. From the presentation, I learnt on the importance of using visual aids in teaching and learning a language. Since my specialization of study is education, I gained much on how to infuse e-learning with the teaching and learning process.

Lastly, the whole presentation was very productive and one that can be included in the teaching and learning of language especially foreign languages. In Kenya this option of using e-learning is promising due to the development of Information Technology although it is at a slow rate. In the future, with proper strategies put in place, the use of e-learning in classrooms could tremendously improve the teaching and learning process especially foreign languages and Japanese Language in this case. Thank you.

My experience in Japan.

Flency Atswenje

It was my dream come true for me to go to Japan. I received a scholarship from the Japan Foundation, Japanese Language Institute to participate in the 2010 Japanese Language program me for overseas students. I received this scholarship because I sat for Japanese language proficiency test in 2009 which I scored high marks. The program me had 32 participants form 18 different countries all over the world for example Brazil ,Indonesia,Egypt,Hungary e.t.c

The programmes content which was very organized and very intensive was of great importance for me as a Japanese language student. The program me consisted of Japanese language classes which majorly included ;Discussions, Speech writing and presentations and Interview lessons. In discussions lessons we were able to discuss on various topics such as ;Family and Marriage ,Education ,Traditions and annual events ,University life and work in Japan. During these discussions we were also able to compare and contrast these topics with our own countries. So it was not only a chance to learn about Japan but also about the other countries that were represented .

In speech lesson, we were taught how to write a good speech in Japanese language and also presentation skills. We wrote two speeches which everyone had to present in front of the other colleagues and also university students at Ritsumeikan university in Kyoto.

In the interview lessons, we were divided into groups of four members where we were to choose on a topic of interest which we would carry out interviews on. We then taught how to formulate interview questions and how to carry out an interview. We carried out the interview with the International Student Association Students in Kobe and also the local neighboring Japanese people who were invited at the centre.

We also had Exchange activities where we visited Tarui Primary school, ISA in Kobe and Ritsumeikan University in Kyoto. There were also study trips to Tokyo, Kyoto ,and Hiroshima and also an excursion to Osaka which made the Program me really fun!

For cultural activities we had a home visit where each of the participant visited a Japanese home for dinner. I had a chance to take part in Wadaiko (Japanese drums),Sado (Tea ceremony)and lastly kimono which was my best cultural activity.

I cannot deny that it was a life changing opportunity. To me it was a lifetime experience, a fabulous experience that I believe that am not the same not only as a Japanese language student but also as a person who had longed to develop her language skills in Japanese language and enjoy the taste of exotic cultures and experience life in new dynamic cities.

I was not only able to deepen my Japanese language skills through lots of writing, speaking and listening in the discussions lessons, speech writing and presentations and carrying out interviews practically with the native speakers but it was a chance to build my confidence as there were many presentations.

My innermost gratitude go to Japan Foundation for giv-

ing me a chance in a million .I feel honored and privileged to have participated in this programme.THANK YOU SO MUCH!

Eラーニング勉強会報告

2011年2月5日、JALTAK定例会の折に、E-learning勉強会として、教員のコンピューターの利用についての意識の再確認をし、拙サイト　http://j-learning.com/を紹介させていただきました。参加してくださったKWS Training Instituteの小谷裕子さんの報告をご紹介します。(蟻末)

小谷 裕子
KWS Training Institute 日本語教員
Odani Yuko
Japanese Teacher, KWS Training Institute

2011年2月5日（土）、ウタリーカレッジで行われたJALTAK会議の際、蟻末先生によるe-learningのセミナーが行われ、コンピューター環境が整っているとはいえないケニアではあるが、授業にe-learningをどのように取り入れることができるかを考えた。

まず、ケニア人日本語教師と日本人日本語教師とがペアになってディスカッションし、授業にコンピューターをどのように取り入れているか、意見交換をした。それから、蟻末先生ご自作のe-learningサイトを見ながら、授業へのe-learningの取り入れ方を考えた。

今回のセミナーに参加して、それぞれの機関でのコンピューター環境の違いや、どのようにコンピューターを使っているかの意見交換ができたことは有意義だった。プロジェクターを使って、大人数クラスや狭い教室での授業を工夫されている様子や、学生がプレゼンテーションをするときにパワーポイントを使うなど、楽しそうなクラスをされている様子が伝わってきた。宿題や試験などのハンドアウト作成や成績処理などにコンピューターを使われるが、パワーポイントを使われている先生は少なかった。私自身は授業でパワーポイントを使うことが多いため、パワーポイントの使用を見直す機会になった。また、日本語学習サイトや日本の音楽などを学生に紹介しても、教師から押し付けられたものに学生は興味を示さないことがあるため、いかに学習者の興味をひくかが大事かということに共感した。それから、学習者の自主学習や、宿題・テストなどの授業準備等にも使うことができる蟻末先生ご自作のe-learningサイトは一見の価値ありだった。うまく活用し、効果的な授業を工夫していきたいと思った。

編集後記

昨年八月十三日にケニアに着任してから、六か月以上が経ちました。以前の勤務地であるフランスとの違いに戸惑いながらも、少しずつ生活にも慣れてきました。ケニアでの日本語教育の発展にはまだまだ課題は山積しておりますが、現地教員と手を携え、困難を乗り越えて行きたいと考えています。今回の第一号会報を発行するにあたり、寄稿、協力してくださった皆様、ありがとうございました。ケニアからの情報発信の第一歩となり、大変嬉しく思います。皆様の協力により、素晴らしい会報にして行くため、今後ともよろしくお願いいたします。　(蟻末)

JALTAK
(Japanese Language Teachers' Association of Kenya)
ケニア日本語教師会
jaltak[at]e-nihon.net